

片山遺跡C・D地点発掘調査概報

(県立南部高等学校々庭)

1981・3

和歌山県教育委員会

社団法人和歌山県文化財研究会

序

和歌山県の中央部にあたる南部川流域は、全国でも数少い銅鐸が6点も出土するなど弥生時代文化の一中心地として、その役割をはたしてきたところであります。

今回この南部川河口にあります県立南部高等学校において校舎改築・合併処理場設置の工事計画をもち、その実施にふみきったのでありますが、従来より同校には片山遺跡として、弥生時代等の遺構・遺物が確認されておりましたので関係機関と協議のすえ埋蔵文化財発掘調査を行いました。

その結果、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が確認され、またすでに調査ずみのA・B地点との関連性も十分に見い出すことができ、和歌山県にとって大変貴重な資料を得ることができました。

ここに発掘調査の概要を報告し一般の活用に資したいと存じます。

最後にご援助とご協力を賜りました関係各位に深く感謝の意を表し厚くお礼を申し上げます。

昭和56年3月

和歌山県教育委員会

教育長 高橋正司

例　　言

1. この概報は和歌山県日高郡南部町芝407番地の県立南部高等学校昭和55年度校舎改築工事に関する埋蔵文化財の発掘調査の概要報告である。
2. 本遺跡は昭和52年都市計画道路工事の事前調査で町教育委員会がA地点を、昭和54年に南部高校校舎改築にともないB地点の発掘調査をそれぞれ実施している。
3. 発掘調査は社団法人和歌山県文化財研究会が県教育委員会の指導を得て昭和55年7月22日から9月10日にかけて実施した。
4. この調査には、永光寛（県教育庁文化財課技師）が主としてあたり、川崎雅史が補佐をした。浜岸宏一（県立田辺工業高校教諭）・水本雄三（県立南紀高校教諭）・阪本敏行（県立熊野高校教諭）・古田晋一（近畿大学4回生）に協力を得た。巽三郎氏（県文化財審議委員）には調査中種々の助言を得た。
5. この概報の編集は、永光寛がおこない図版作製には川崎雅史・古田晋一の協力を得た。
6. この概報で使用した略記号は「SD」が溝状造構を「SK」が土壙をあらわす。
7. この概報図版中の矢印はすべて磁北を意味する。

目 次

序	
例 言	
位 置 図	1
I 位 置 と 環 境	2
II 調 査	2
遺 構	3
1. 溝 状 遺 構 (S D)	3
2. 土 壤 (S K)	3
III 小 结	7

図 版 目 次

図版第一 片山遺跡A・B・C・D関係位置図	
二 遺構全体図	
三 遺構実溝図 (S D-1・2・3)	
四 遺物実測図	
五 遺構写真(一)	1. 遺構全景
	2. S D-2・土壤
六 シ (二)	1. 調査区西北から
	2. シ 西部
七 シ (三)	1. シ 東北から
八 遺構・遺物写真	1. S D-1
	2. 弥生土器片



位置図

1. 片山遺跡
2. 片町遺跡
3. 高見遺跡
4. 芝古墳群
5. 塩田古墳群
6. 大塚遺跡
7. 田文字I遺跡
8. 雨乞山銅鐸出土地
9. 大久保山銅鐸出土地
10. 久地崎銅鐸出土地
11. 常楽銅鐸出土地
12. 下の尾銅鐸出土地
13. 城山古墳

I 位置と環境

和歌山県のほぼ中央部、紀伊水道に臨む海岸線に位置する片山遺跡は、南部川河口付近に発達した海岸砂丘上に位置する。砂丘は南部川と埴田川に挟まれた約1.6kmの間に発達し弧状を呈し、埴田側が低く北西方向に漸次高(海拔6~8m)くなってゆく。

本遺跡は、砂丘の中央よりやや埴田側、国鉄南部駅東南3~400mのところを中心に広がっている。^{註①}発掘調査が完了しているA地点から、縄文時代最終末と考える土壙、弥生時代中期後葉の土壙墓群^{註②}と溝状遺構・古墳時代の方形周溝墓等が検出され、またB地点からは、弥生時代中期の土壙墓11基・溝状遺構1条および古墳時代の土壙1基と弧状を呈する溝状遺構1条、時期不詳の土壙(弥生時代から古墳時代にかけてか)12基を検出している。このA・B両地点は約50m隔てて対峙しているが、遺構遺物の内容から弥生時代中期を中心とした同一範囲内の墓地と考えざるをえない。

この砂丘には、この他に墓址と考えられる地点が2個所あり、ともに本遺跡同様砂丘の稜線地帯^{註③}に位置している。1個所は砂丘の最高所付近の高見遺跡で弥生時代中期後葉の水差形土器が、又數10m程離れた地点に関東系の弥生時代中期の壺がそれぞれ出土している。南部駅の南西約100mの片町遺跡は庄内期に位置付けされる壺形土器2点と器台形土器1点が出土している。

註①「南部町片山遺跡の調査」和歌山県埋蔵文化財情報No.9 (1978.1)

②「片山遺跡B地点発掘調査概報」和歌山県教育委員会 (1979.3)

③「紀伊日高郡南部町北遺出土の弥生式土器」龍野路考古2 (1962)

II 調査

今回のC地点は、B地点の西側に接するところで、砂丘稜線地帯からやや後背地に向うところである。

すでに過去2回にわたる校舎の建替工事がおこなわれ相当な数の遺構が消滅しているものと考えられる。

土層は、基本的なベースを暗青灰色の砂と考えたが、場所によりかなりの変化(砂粒の大小)が認められ、ベースの上層は、暗黄褐色砂が堆積するところと、暗赤黄褐色砂(若干土質混入)が堆積するところにわかれる。

調査にあたっては、A・B地点で共用した20m方眼の地区割りを利用し、小区画2m方眼とし調査の便宜を計った。

遺構

明確に時期を決定できるものは少いが全部で29基の遺構を確認した。弥生時代の土器片をもつ土壤が12基と溝状遺構2条、古墳時代の土器片を埋土に包含する溝状遺構1条で他は時期を考える手段をもたないものである。

1 溝状遺構 (SD)

SD-1 長さ7.40m・幅1.60m・深さ0.67m。断面は上方がやや広がるU字状をなし、平面は直線状に終っている。埋土は5層に分層でき最下層より5世紀後半かと考える須恵器片が出土している。遺物は他に弥生土器片及び軽石等が確認される。

SD-2 長さ18.20m以上・幅1.00m・深さ0.30m。断面は上方がやや広がるU字状をなし平面直線状に調査区を南北に横断する。埋土中に弥生土器・軽石・礫が流れ込んでいる。この溝状遺構は砂丘の稜線と一致する。

SD-3 長さ3.90m以上・幅0.80m・深さ0.26m。断面は上部がやや広がるU字状をなし平面直線状にのびる。埋土は暗黄褐色の單一層で弥生土器片及び軽石・礫が出土している。

2 土壙 (SK)

SK-1 長径1.70m以上・短径0.80m・深さ0.08m。全容が明らかではないが一応土壤と解する。上部に擾乱をうけておりわずか8cmの深さしか残存していない。埋土は1~1.5cm大の細礫が單一層として確認でき、中に遺物は包含されていなかった。

SK-2 長径1.06m・短径0.90m・深さ0.24m。不整橢円形。埋土は、基本的に暗黄褐色砂であるが、やや赤味をおびた砂質土を含んでいる。遺物は弥生土器片・軽石・砂岩が出土している。

SK-3 長径1.18m・短径0.73m・深さ0.23m。不整橢円形。埋土はSK-2と同じ暗黄褐色を基本とし、赤味をおびた砂質土を含んでいる。弥生土器片・軽石・礫が出土。

SK-4 径0.72m・深さ0.22m。不整円形。埋土はSK-2・3と同じで、弥生土器片・軽石と少量の炭が出土している。

SK-5 長径1.52m以上・短径0.88m以上・深さ0.13m。擾乱をうけ全容は不明であるが長楕円形の平面を呈すると考える。埋土はSK-2~4と同じであるが、やや赤色の度合いは大きい。弥生土器片・軽石および砂岩が出土している。

SK-6 長径0.80m以上・短径0.84m・深さ0.20m・橢円形を呈すると考える。埋土は暗赤黄褐色砂で1cm大の細礫が多い。出土遺物なし。

SK-7 長径1.48m・短径0.86m・深さ0.21m。平面プラン長楕円形。埋土は暗黄褐色の砂でやや赤色をおびた砂質土が含まれる。弥生土器片と軽石が出土している。

SK-8 長径0.74m・短径0.63m・深さ0.22m。不整円形。埋土はSK-2~5と同じで軽石と

礫が出土。

S K-9 長径1.67m・短径0.94m・深さ0.24m。不整楕円形。埋土は暗赤黄褐色砂で、弥生土器片・軽石および礫が出土している。

S K-10 径1.04m・深さ0.29m・平面プラン不整円形。埋土はS K-9と同じであるが、やや赤色がとぼしい。軽石と礫が出土している。

S K-11 長径0.80m以上・短径1.00m・深さ0.34m。平面プラン隅丸の矩形を呈するが全容不明。埋土は暗黄褐色砂で、やや赤色をおびる砂質土が含まれる。弥生土器片と軽石が出土している。

S K-12 長径1.28m・短径0.82m以上・深さ0.17m。不整楕円形を呈すると考えるが、S K-26に切られており全容は不明。埋土は暗黄褐色砂で1cm大の細礫が混入している。拳大の礫が1点出土。

S K-13 深さ0.13m以上で周囲が擾乱されているため形状不明。

S K-14 長径1.52m・短径1.06m・深さ0.26m。長楕円形。暗黄褐色砂を埋土とし弥生土器片・軽石および礫が出土している。

S K-15 長径1.94m・短径1.56m・深さ0.42m。不整楕円形。埋土は3層に分層できる。上から土分を含まない0.5~1.0cm大の細礫が第1層で第2層は暗赤黄褐色砂質土、第3層は暗黄褐色砂である。S K-14と切り合い関係をもち本遺構の方が古い。軽石出土。

S K-16 長径0.40m以上・短径0.92m・深さ0.29m。埋土は2層に分層、基本的に両層とも暗黄褐色の砂であるが赤色をおびる砂質土の量により分層できる。

S K-17 長径1.74m・短径1.24m以上・深さ0.65m。不整楕円形の平面プランを呈するが、2層に分層できる埋土等において他の土壤とは異なる。上層は土分を多く含んだ黒茶褐色砂質土で焼土・炭が混入し、下層は暗黄褐色砂で若干赤色をおびる砂質土が含まれる。弥生土器片・軽石・礫が出土している。

S K-18 長径1.34m以上・短径0.62m以上・深さ0.37m。

S K-19 長径1.29m・短形0.67m・深さ0.19m。不整楕円形。暗黄褐色砂に若干の赤色の砂質土が含まれている。弥生土器片および軽石が出土。

S K-21 長径1.00m以上・短径0.44m以上・深さ0.33m。暗黄褐色砂で若干の赤色砂質土が含まれている。弥生土器片および軽石が出土している。

S K-22 長径0.66m・短径0.55m・深さ0.12m。不整円形を平面プランにもつすり鉢状の土壤。弥生土器片が出土。

S K-23 長径1.02m・短径0.76m・深さ0.36m・不整楕円形を平面プランにもつ。礫が出土。

S K-24 長径1.17m・短径0.88m・深さ0.21m。不整楕円形で礫が出土している。

S K-25 長径1.00m・短径0.72m以上・深さ0.36m。

S K-26 長径1.26m以上・短径0.54m以上・深さ0.23m。S K-12を切り込む。

出土遺物

番号	器形	口 頭 部	体 部 ・ つ き 部
1	壺	頭部には櫛描列点文をほどこし、体部には櫛描直線文をもつ。	_____
2	壺	や、内萼する口縁部をもつ口縁直下に6条以上の凹線文が認められる。 口縁端部は内傾した平坦面を有する。	_____
3	壺	_____	タテ方向の粗いハケ目を施し、その上からナデ調整をおこなう。内面剥離が著しい。
4	壺	頭部にヨコナデが認められる。	_____
5	壺	_____	最大径より上位は、細かいヨコ方向のハケ目で調整する。
6	壺	_____	左上りのタタキ目が認められる。 内面は剥離する。
7	壺	棒状工具による凹線文が7条以上認められる。	_____
8	壺	櫛描列点文を有する。 内面ヨコナデ調整。	_____
9	壺	口縁端部に凹線をほどこし、そのくぼみに棒状工具による刺突文が1点認められる。	_____
10	壺(底部)	_____	_____
11	壺(底部)	_____	_____
12		_____	器壁のうすい土器でタテ方向に細かなハケ目で調整する。 内面にもタテ方向のハケ目が認められる。
14	甌	口縁端部の刻目をほどこす。 口縁直下に粘土の縦目が認められる。 内面板状工具によるヨコナデ調整。	右上りのタタキ目が認められる。
15	高杯	_____	_____

観察表

底 部・脚 部	色 調	質・胎 土	備 考
_____	淡赤黄褐色	砂粒多く含む。 若干の雲母片を混入する。 焼成は堅緻である。	SK-9出土
_____	①よりも赤色調を強くもつ。	胎土は①に似るが雲母片は認められない。 焼成は堅緻である。	
_____	淡褐色	砂粒を多く含む。 胎土は②に類似する。	
_____	②に類似	胎土・質ともに②に類似する。	SK-19に接する擾乱より出土。
_____	②に類似	胎土・質ともに②に類似する。	赤黄褐色砂層より出土
_____	淡赤黄褐色	細かな砂粒が混入する。	赤黄褐色砂層より出土
_____	淡褐色	砂粒が少く 焼成は堅緻である。	
_____	①よりもやや赤味をおびる。	①の胎土と同じ	SK-19付近出土 ①と同一個体か。
_____	淡赤褐色	細かい砂粒を含む。	SK-19付近出土
内外面ともにナデ調整を施す。 体部と底部の接点に指頭圧痕が認められる。	淡赤黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む 焼成堅緻。	SK-9付近 赤黄褐色砂層出土。
突出した底部をもつ。 内外面ともに剝離している。	淡赤褐色	1~2mm大の砂粒を多く含む。	擾乱部出土
_____	褐 色	細かな砂粒を含む。 焼成は堅緻。	淡黄褐色砂層出土
_____	淡褐色	細かな砂粒を多く含む。	*
八字状に聞く脚部をもつ。 透孔は3穴認められる。 内面ヨコ方向のヘラケズリが認められる。	淡褐色	細かい砂粒を多く含む。	*

III 小 結

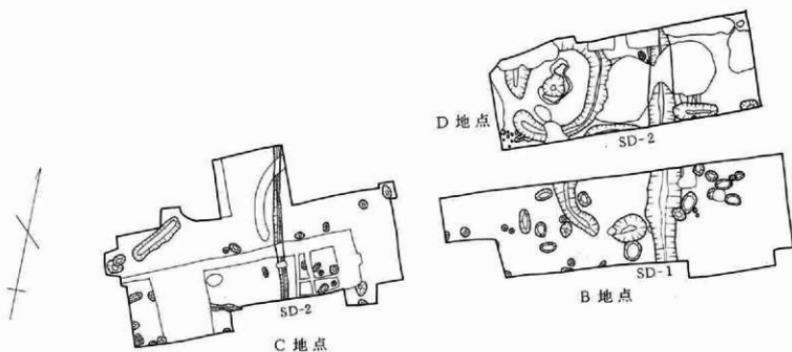
2時期にわたる校舎建築工事により調査地区の大半が擾乱され遺構検出面より上層はすべて擾乱土であった。検出された遺構は土壙を主体としたもので、その他に溝状遺構3条が確認できた。

遺構の位置関係は、溝状遺構SD-2が砂丘の稜線に平行して調査区のほぼ中央を南北に横切り、東側に土壙12基、西側に土壙13基と溝状遺構2条が存在する。しかし、SD-2によって分割された各土壙は、それぞれにおいて遺物が出土するが時期を決定するほどの資料にとぼしく、その大半が弥生土器片であると解釈されるのみである。これらの遺構の性格に関しては、A・B地点の土壙墓の平面プランと類似していることをもって墓址と考えるが、A・B地点にみられた穿孔を有する土器等の出土を確認することはできなかった。ただSK-17に関しては、B地点のSK-14がそうであったように他の土壙とは異なり埋葬を意図した土壙ではないと考えられる。

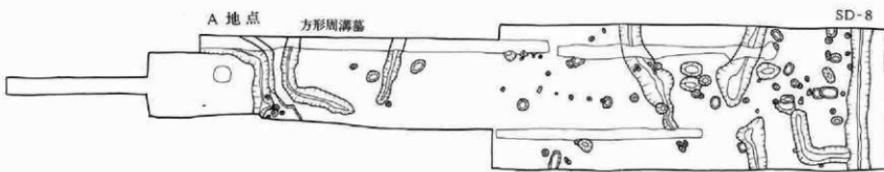
SD-1は、5世紀後半と考える須恵器片が出土している。片山遺跡で同時代の遺構は、A地点の方形周溝墓とそれに隣接する溝状遺構（SD-4）があり、両地点は約50mの間隔をもっているが、ともに砂丘の稜線、あるいは稜線よりも海側に面している。

SD-2は、B地点のSD-2と平行の関係にあり約44mの間隔をもっている。B地点のSD-2はA地点のSD-8と同一直線上に位置しており、ともに弥生時代中期後葉と考えられる。

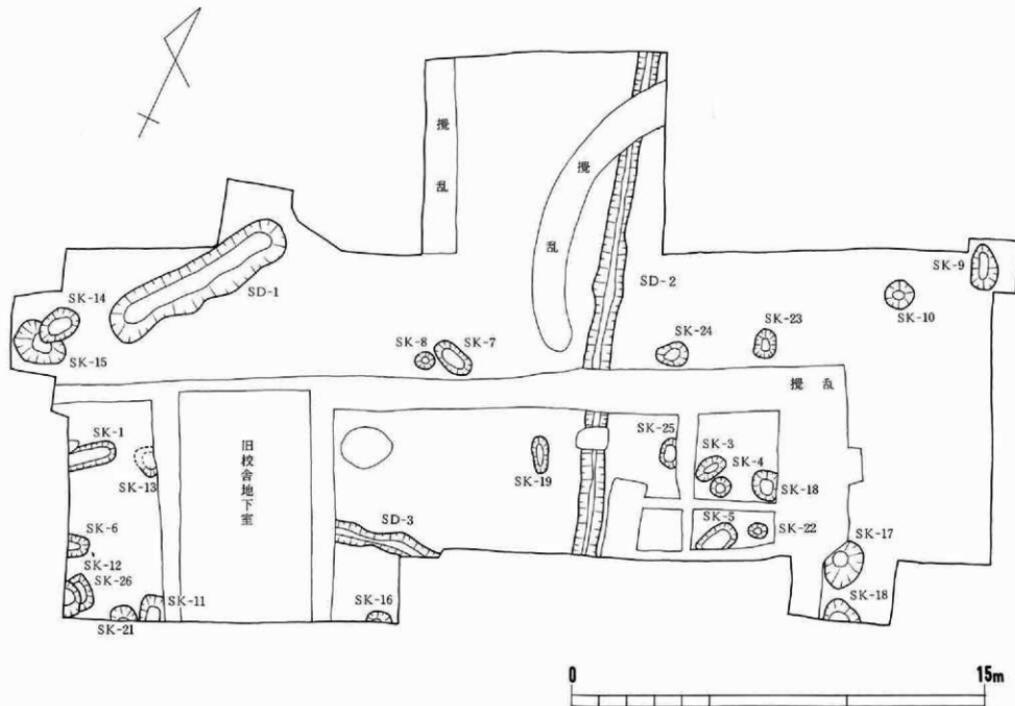
図版第一 片山遺跡A・B・C・D関係位置図



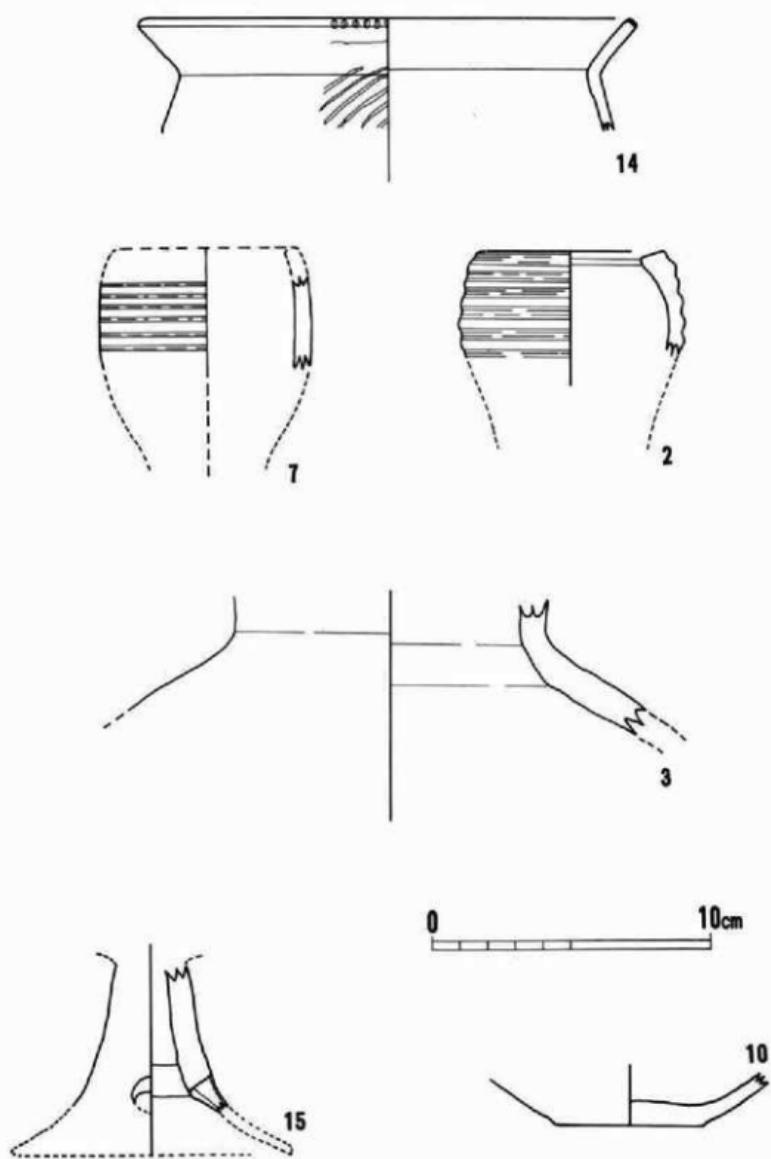
0 50m



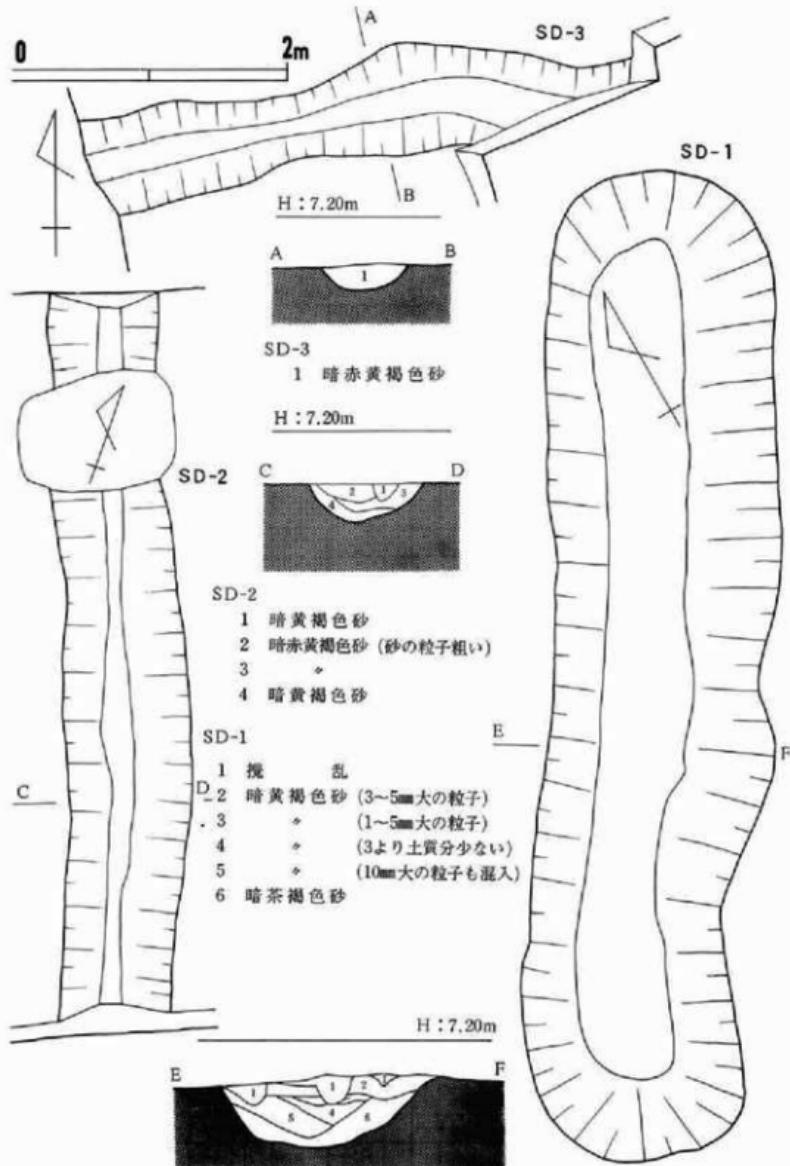
図版第二 遺構全体図



図版第三 遺構実測図



図版第四 遺構実測図



図版第五 遺構写真 (一)



1. 遺構全景



2. SC-2



1. 調査区東北から



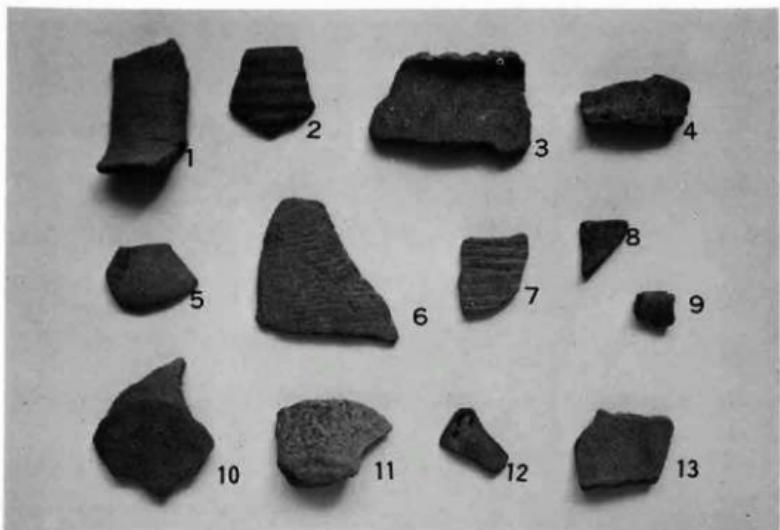
1. 調査区西北から



2. 調査区西部



1. SD-1



2. 弥生土器片

例　　言

1. この概報は和歌山県日高郡南部町芝407番地の県立南部高等学校昭和55年度合併処理場（浄化槽）設置に関する埋蔵文化財の発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は社団法人和歌山県文化財研究会が県教育委員会の指導を得て実施した。
3. 発掘調査は県文化財保護審議会の指導を受け、永光寛（県教育府文化財課技師）が担当し、川崎雅史が補佐した。近藤義郎（岡山大学教授）・都出比呂志（県文化財審議委員・大阪大学助教授）両氏には調査中種々の助言を受けた。
4. この概報の編集は、永光寛がおこない、図版作製には川崎雅史・古田晋一（近畿大学4回生）の協力を得た。
5. この概報で使用した略記号は、「S D」が溝状遺構を「S K」が土壤をあらわす。
6. この概報図版中の矢印はすべて磁北を意味する。
7. 今回の調査により検出された遺構のうち方形周溝墓は埋めもどし保存とし、その他の遺構は記録保存の処置をとった。

目 次

I 調 査	20
II 遺 構	20
1. 方形周溝墓	20
2. 溝状遺構	21
3. 土 壤 (墓)	21
4. ピット群	21
III 方形周溝墓出土遺物	22
IV 小 結	25

図版目次

図版第一	遺構全體図		
第二	方形周溝墓実測図		
第三	遺物実測図		
第四	*		
第五	遺構写真(一)	1. 方形周溝墓 2. SD-2を中心とする遺構群	
第六	*	(二)	1. SD-4 2. SD-2
第七	遺物写真(一)	1. 方形周溝墓勾玉出土状態 2. 管玉・勾玉・石鈎	
第八	*	(二)	

I 調査

本遺跡は、紀伊水道に臨む南部川河口に形成された標高約7mの海岸砂丘上に位置する。

すでに過去3回の発掘調査が実施され、縄文時代晩期末・弥生時代中期・古墳時代5世紀後半の遺構遺物が検出されている。遺構は土壙（墓）を中心に溝状遺構・方形周溝墓などが検出されている。土壙の中には穿孔を施された尖形の土器が埋置されるなど一般的な集落では考えられない墓址特有の遺構遺物の構成が認められる。

今回の調査地点は、上記墓址群の範囲に含まれ、B・C地点に接するところで砂丘の稜線を後背側に若干下ったところである。この地点もB・C地点と同じく学校敷地内で、昨年まで木造校舎が占地していた。木造校舎の基礎は浅く遺構を壊すほどではなかったが、校舎取り壊し時の廃材を棄てるために掘ったとみられる擾乱層が数ヶ所認められ、かなりの遺構が寸断されていた。

調査地点での基本的土層は、上位から表土および整地土層・暗茶褐色砂層・淡赤黃褐色土混りの砂層そして遺構表面の暗青灰色砂の堆積順になる。

暗茶褐色砂は、菜畑とみられこの層より掘り下げられた幅0.20mの筋掘りが約1.20m間隔で南北方向に施されており深いものは、遺構をえぐり取っているものもみられた。とくに方形周溝墓の主体部付近は顕著である。

淡赤黃褐色の土混りの砂が認められるところは遺構が集中しており、それが少いかあるいは検出されないところは暗黄褐色砂が認められる。概してその状況は、調査区中央より東側に暗黄褐色砂があり、西側は淡赤黃褐色土混りの砂層が分布している。

調査にあたり遺跡の略名称を「KY-D」とし、A～C地点で共用した20m方眼の地区割りを利用し、小区画2m方眼とし調査上の便宜をはかった。

II 遺構

今回確認できた遺構は、溝状遺構5条・土壙（墓）2基・方形周溝墓1基とピット8穴である。時期は弥生時代中期と庄内期に大別できる。

1 方形周溝墓

中央に主体部をもち南北方向に軸をもつ若干重んだ隅丸矩形で周溝西辺の中央よりやや南に陸橋部を形成する。東西内径7.20m・南北9.50m（周溝部を含めると東西12.3m・南北13.7m）。主体部東西2.50m・南北2.20m・深さ0.60m・周溝の幅は1.50mから3.50mで北辺が著しく広がり、深さも0.45mから0.70mと幅・深さともに一定しない。掘り残された陸橋部は幅1.50mである。

主体部の土壙は東西を軸としてほぼ中央に掘り込まれ、断面舟底状を呈している。土壙の肩部（

西側を除く)とその周辺には、灰色および暗紫褐色の粘土・粘質土が認められる。土壤との関係は、砂質のベースを若干掘りくぼめ粘土・粘質土を充填し、その後、粘土を切りこむように土壤がほされている。粘土はこの他に土壤内と周溝内に若干流れ込んでいるのを確認している。

出土遺物は、土器類と玉類の2種類でいずれも周溝よりの出土である。

土器は南東隅付近で底部近くに穿孔を有する二重口縁の壺(7)が出土しているが多くは北西隅と南西隅付近に集中している。又南底直上に勾玉1点・管玉7点が1個所に集中して出土している。又これらの他に後世の落ち込みと考える石鏃が陸橋部北側の周溝に出土している。

2 溝状遺構

SD-1 搾乱及びSD-2に切られ長さ2.10m以上・幅0.80m以上・深さ0.29m以上を計るのみであるが、埋土より櫛描直線文及び波状文を有する壺が出土しており、SD-2に先行する弥生中期中葉の溝状遺構と解することができる。

SD-2 長さ11.5m以上・幅3.10m・深さ約0.75mで断面V字状を呈する。搾乱により大きく2分割されるが、B地点SD-2に続くものである。埋土中には拳大の礫・軽石(大きいものは人頭大)が多量に認められるが、時期を決定する遺物は出土していない。しかしSD-1を切り込んでいる3点、弥生時代中期中葉に比するSD-4とは土層を観察した結果切り合い関係が認められない点を考慮すればSD-4と同時期と考えざるをえない。

SD-3 SD-2の西側に直角に接するように太く短く直線状に完結する溝状の遺構である。長さ7.00m・幅1.10m以上・深さ0.60m。SD-2・4と同じ時期で高杯の脚台部が出土している。

SD-4 SD-2の東側に位置するものでSD-3と同様の形態をもっている。長さ5.30m・幅2.20m以上・深さ0.65m。

SD-5 長さ2.00m以上・幅0.80m・深さ0.29m。埋土に焼土を含む。方形周溝墓に切られている。

3 土 墓 (墓)

SK-1 SD-1の西側に位置する。搾乱により土壤の上部が削り取られ底がかろうじて残っている。平面プラン長楕円形。長径1.15m・幅0.60m・深さ0.26mで、土壤の西端には口縁部を東に向かた弥生時代中期中葉の土器(9)が埋置されている。

SK-2 SD-4の東側に位置する不整楕円形を平面プランにもつ土壤である。長径2.20m・幅1.15m以上・深さ0.36m。黒褐色砂の埋土中には拳大か、あるいはそれより若干大きい川原石が多く流れ込み、他の土壤とは性質をやや異にする。

4 ピット群

方形周溝墓の南西に溝状遺構SD-5とピット8穴を検出した。ピットの直径は0.24~0.64mで深さは0.08~0.37mをはかる。このうち2穴には炭化した0.2mの柱根が残存していた。これらのピット群とSD-5には埋土中に焼土が含まれ两者において関連性が認められる。時期は、SD-

5が方形周溝墓に切られており庄内期以前とすることができます。

III 方形周溝墓出土遺物

方形周溝墓の周溝より土器10点と玉類8点が出土している。

土器は、壺が7点と小型甕1点・鉢2点の構成になり、そのうち壺(7)1点・小型甕(3)・鉢(1・2)が完形品として出土している。

壺は、小型丸底壺(4)かと考えられる1点を除き他はすべて二重口縁部を有している。又これら二重口縁をもつ6点のうち4点は櫛描文・円形浮文などの文様をほどこしている。

玉類は、勾玉1点と管玉が7点である。1個所に集中して出土しているところから8点がセットになっていたと考えられる。

勾玉の長さは2.80cmで緑色を呈しやや軟質である。石質は粘板岩製である。

管玉も7点ともに碧玉製ではなく勾玉と同じく粘板岩製であり淡緑色を呈し軟質である。大きい方から順に計測すると、①長さ2.20cm・径0.39cm・孔径0.17cm、②長さ2.15cm・径0.39cm・孔径0.16cm、③長さ2.08cm・径0.38cm・孔径0.18cm、④長さ1.70cm以上・径0.38cm・孔径0.17cm、⑤長さ1.57cm・径0.40cm・孔径0.16cm、⑥長さ1.34cm・径0.37cm・孔径0.16cm、⑦長さ0.95cm・径0.42cm・孔径0.16cmとなり7点とも両側穿孔をほどこしている。

その他の遺物として周溝に落ちこんでいた平安時代の石鎧1点がある。

石鎧は、横3.50cm・縦3.15cmで厚さ0.60cmをはかる。中央部やや下方に長方形(1.6cm×0.55cm)の孔を有し、裏面四隅に潜り孔をあけている。石鎧の縦・横の比は0.9:1になる。石質は大理石で灰白色にうす茶の縞文様が認められる。

時期は、長方形の孔を有している点、鉢留ではなく潜り孔をあけている点を考慮すれば9世紀初頭に位置づけされるものである。

出土遺物

番号	器形	口 頭 部	体 部
1	小型鉢	内寄する口縁部がとがり気味におさめられる。 外面は口縁部をつくりだすときについた指頭圧痕が認められる。	外面にくらべ内面は丁寧につくる。 内面タテ方向にナデ調整をおこなう。
2	小型鉢		①の鉢と同じく内面を丁寧につくる。 内面ハケ目が若干認められるが、およそハケ目を消している。 外面は1cm間隔で粘土の織目が4条認められる。 体部中位に穿孔を有する。
3	小型甕	外上方に短くひらく口縁部をもつ。 外面に口縁部をつまみあげたときについた指頭圧痕が認められる。	体部全体に粗い連続したラセン状のタタキ目を有する。 体部と底部の接点付近に穿孔が認められる。
4	小型壺	や・内寄して外上方に短く開く口縁部をもつ。 内外面ともにヨコナデ調整	_____
5	壺	頭部から短く外反しながらたち上り屈折して外上方にひらく。 口縁端部は丸くおさめ1.5~2cm間隔で竹管文をほどこす。 屈折部にも円形浮文上に竹管文を加えている。	_____
6	壺	外上方に大きく外反しながら立ちあがり、短く屈折して上方につづく。壺部は丸くおさめるがヨコナデ調整時についたものか、1条の沈線が認められる。 屈折部より上方に竹管文をもつ円形浮文が付される。櫛描波状文がほどこされる。	外面は頸部から肩部にかけてヘラミガキをおこない内面はヨコ方向のヘラケズリをしている。
7	壺	短く外上方にひらく屈折して外上方にたちあがる。 屈折部より上方に円形浮文が付され、その上に竹管文を加えている。その上方に櫛描波状文をつけ内面にも2条の櫛描波状文をほどこす。 端部にも竹管文をつける。屈折部より下方はタテ方向のヘラミガキ	球形をした体部であるが下方においてや・すぼまる。 ヘラミガキをほどこしているが一部にタタキ目の痕跡が認められる。
8	壺	外反しながら立ちあがり屈折して上方にのびる。 端部は平坦につくる。 屈折部より上方をはりつけた粘土の織目が明確に認められる。内外面ともに粗いハケ目のあとをナデで調整している。	_____
9	壺	口縁端部はや・平坦におさめる。 頭部から口縁部にかけて円筒状につくるが、やや外反している。 黒斑が認められる。	体部の中位に最大径がくる。口縁直下から粗いハケ目が体部最大径付近にまで認められ、その上に9条の櫛描直線文がほどこされる。 体部下半に黒斑が認められる。
10	壺	_____	最大径は体部中位よりや・上方にある。 体部上半に左上りのタタキ目が認められ、体部下半はタテ方向のヘラケズリのあとナデ調整がほどこされる。底部近くに穿孔を有する。

観察表

底 部	色 調	質・胎 土	備 考
形式のみの底部で非常に不安定である。	淡褐 色	1~2mm大の砂粒を含む。	方形周溝墓出土
①の底部と同じく形式のみの底部で不安定である。	淡褐 色	1~2mm大の砂粒を含む	*
①・②と同じく小さな底部	淡褐 色	1~3mm大の砂粒を含む	*
_____	淡赤黄褐色	1mm大の砂粒を含む。 ①~③の土器にくらべ丁寧につくる	*
_____	④よりも赤味がとぼしい。	④の胎土に類似する。	*
_____	淡褐 色	1~2mmの砂粒を含む。	*
や、とがりざみの底部。 底部付近に穿孔を有する。 底部付近に黒斑が認められる。	淡赤黄褐色	胎土緻密で焼成は良好。	*
_____	淡赤黄褐色	1mmの砂粒を含む。 ⑤~⑦の土器にくらべ粗雑さがめだつ。	*
口縁径と同じ数値の底部をもつ。 や、こころもちあげ底になる。	淡赤黄褐色	胎土は砂粒が多く、焼成は堅緻	SK-1出土
体部にくらべや、小さい底部をもつ。	褐 色	胎土 1~2mm大の砂粒を多く含む。	SD-4出土

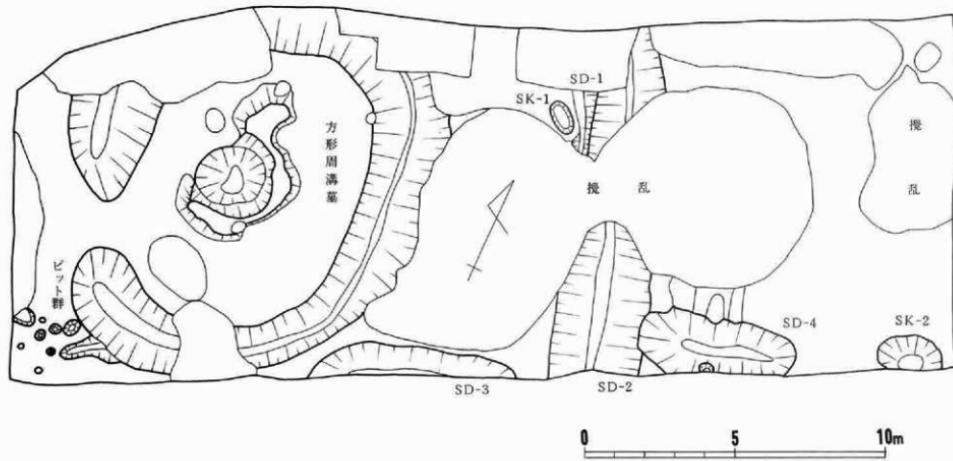
M 小 結 (C地点概報・片山遺跡A・B・C・D関係位置図参照)

今回の調査で片山遺跡4地点の調査面積は約2500m²となり、土壙（墓）70基・溝状遺構17条・方形周溝墓2基、その他ピット多数という構成になった。

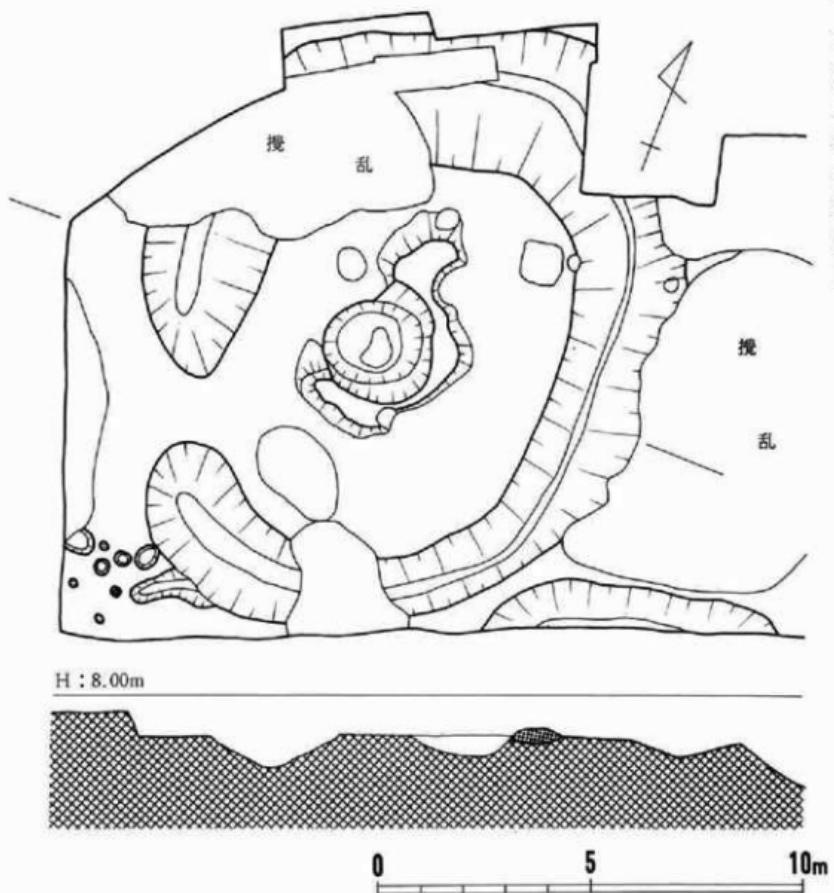
本遺跡での遺構の出現は、縄文時代末にさかのぼり、弥生時代の中期とくに後葉には土壙・溝状遺構が爆発的にふえ、後期には明確な遺構を残していない。庄内期以後は、今回のD地点方形周溝墓・布留式の年代に比定できるB地点SD-1・5世紀後半のA地点方形周溝墓などがあり、それ以後の遺構は確認できない。遺構の確認できない時期の遺物としては、弥生時代後期の高杯片・甕片（ともにC地点）と6世紀末頃の須恵器杯（A地点）などがある。

弥生時代中期後葉の墓は、砂丘の稜線より後背側に位置しており、その範囲はA地点SD-8・B地点SD-2・D地点SD-2とC地点SD-2にかこまれた範囲内と考えられる。A地点のSD-8とD地点のSD-2は、B地点のSD-2をはさんで直線上で結ばれ延長約90mを計りその両端は未だ完結していない。この直線で結ばれた溝状遺構に平行するように約44m隔てているC地点のSD-2は、A地点のSD-8の西側約44mのところへ延びるものと考える。このSD-8西側44mのところは調査中、土器片が点々と認められる状態ではあったが、遺構として明確にしえなかった場所である。しかし、この場所をきかいにSD-8との区域には弥生時代中期後葉の土壙墓群が形成されており、その反対側つまり南側は5世紀代の遺構が集中している。これらのことを考えると、C地点のSD-2がこのA地点へ延びてくることは否定できず、長辺90m以上で短辺44mの溝状遺構でかこまれた範囲が弥生時代中期後葉の墓地であったとされよう。しかし、これらを断定するにはあまりに未調査区が多く今後の調査課題の1つとされる。

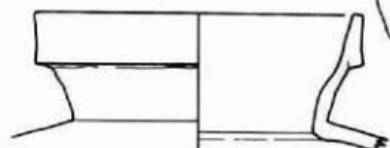
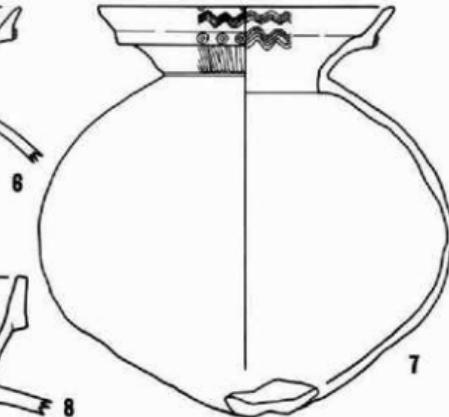
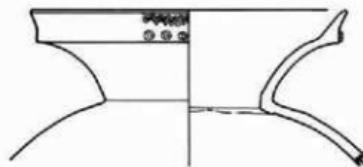
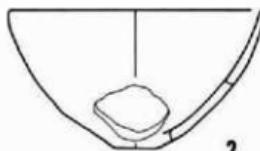
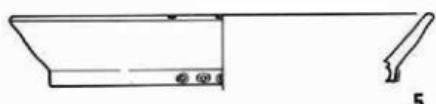
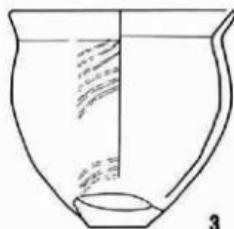
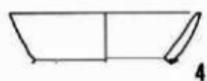
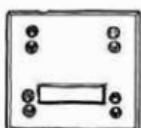
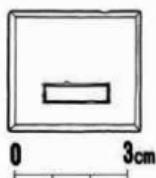
図版第一 遺構全体図



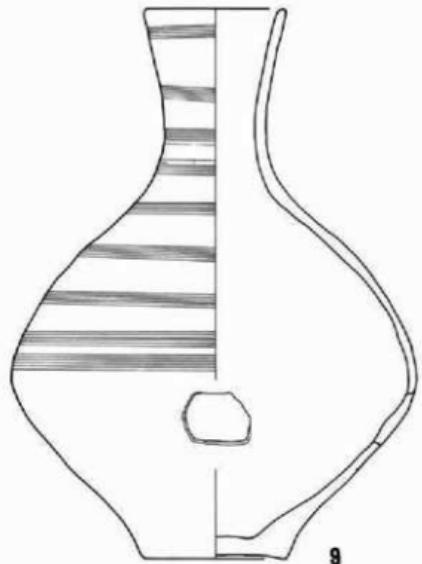
図版第二 方形周溝墓実測図



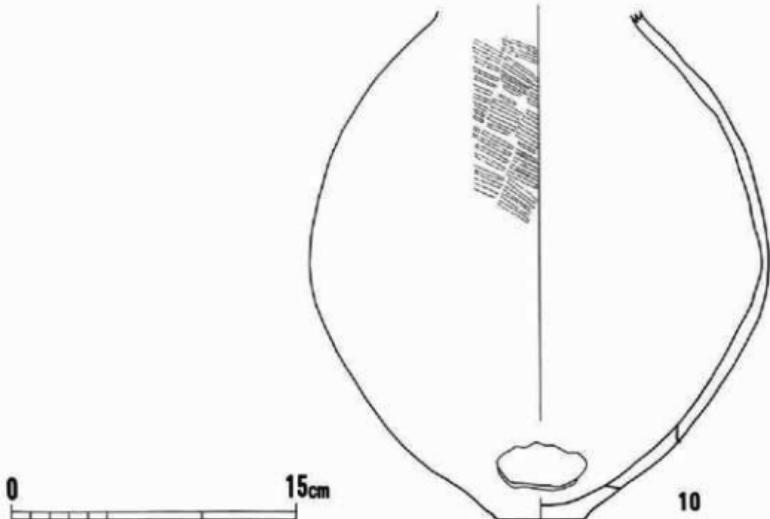
図版第三 遺物実測図(一)



図版第四 遺物実測図(二)



9



10



図版第五
遺構写真
(一)



1. 方形周溝墓



2. SD-2を中心とする遺構群

図版第六 遺構写真(二)



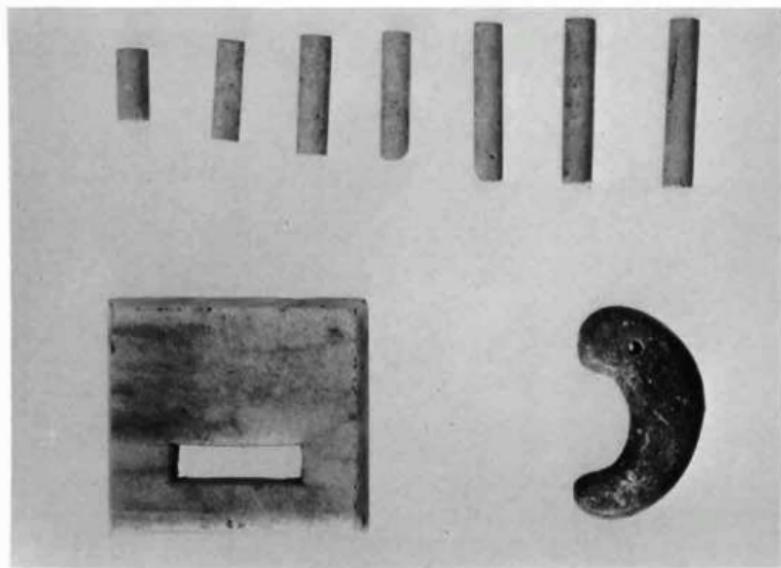
1. SD-4



2. SD-2



1. 方形周溝墓 勾玉出土狀態



2. 管玉・勾玉・石鏡

図版第八 遺物写真



片山遺跡C・D地点発掘調査概報

(県立南部高等学校々庭)

昭和56年3月発行

発行 和歌山県教育委員会

社団法人 和歌山県文化財研究会

印刷 邦 上 印 刷